

●「飢餓祭」(奈良原) 46号

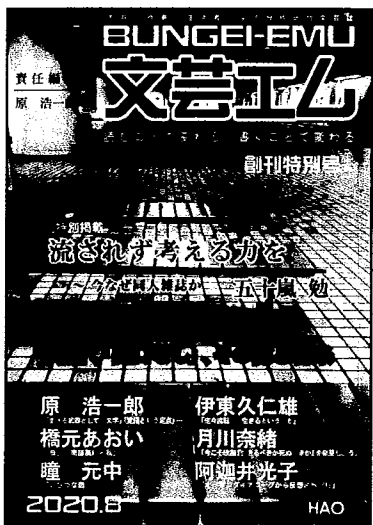
「飢餓祭」は、まとまった同人誌で、各自が個性を守ってそれぞれに表現している。巻頭の「石を投げる」の著者島雄氏は、オーケストラを題材にしたり、音楽方面も趣味多様な上に、巻末の「アフターひじり(続)」で、「教信の千草念仏」や「白隠の健康法」などを取り上げたりしている。多彩で教養も多岐にわたっている。こういう趣味の広さが、同人誌に潤いと幅を付与していることを感じる。また桔梗第三氏の「あの頃のアメリカ/今、どうなっているのだろう——わが回想2」も、七〇年代初頭のアメリカをよく書き記していて、参考になる。現在が逆によくわかるこういう情報は、貴重だろう。

これらのふくらみの中で小網春美氏の「しずり雪」は、男女の一つの姿を描き切って、一つの世界を成立させている。二十六の年齢差のある元会社の社長を、部下だった女性が約束から介護をし、その過程で関係が精神的にもいつそう深まって、最期を看取る話だが、きめ細かな叙述に、人生の手応えがあり、落ち着いたしめやかな歩調の中に、男女の機微がしつとりと伝わってきて、いい味を出し

に生きる意味を見出すかということなのだろうが、しかしとにかくそれらを抜きにしても、長さをまとめて高いレベルに押し上げた力は抜きん出ていて、称揚に値する。優秀賞としたい。

●「文芸エム」(滋賀県) 創刊号

この誌は銀華文学賞を受賞している原浩一郎氏が立ち上げた同人誌で、創刊号にふさわしい鋭気が漲っている。巻頭の創刊の辞にあたる「生きる武器としての文学」にも力が入った言葉がある。「私の文学は私の心が選ぶのだ」「読む者の想定キャパを超える衝撃。思いもよらず心の深奥が衝き動かされ、読む者が圧倒される心的体験。それこそ感動と呼びたいのだ」と、めざす意気は高い。しかし熱量の大きさは、むしろ別なところに出ていて、「覚悟と



全国同人雑誌振興会

飢餓祭

vol.46
2020.May



ている。相続で、数字のにおいが少し漂うのは、味を損ねている部分もあるが、全体としては、男女の愛の深い位置に着地を見せている。ないものねだりかもしれないが、男女の究極としての精神的な結合が、死の向こうまでの貫きを求めるとき、子供が花の枝を折るシーンの涙だけで留まるか、また彼の要求のままに裸で前に立ち眼で交わるだけが真の絆か、もう一つ胸の底を切る精神的なものとの契りがあればさらによかったように思う。「しずり雪」の落ちる音も、もつと地に響いて、それが自分たちにも、テーマにも届いてくる趣を持って、それが自分たちにも、テーマとして言えば、二十六歳という年齢差は、男女の間でそれほど大きな障害になるだろうか。以前文芸思潮の授賞式に参加した三十歳のきれいな女性が二次会に参加して話したところ、ご主人は六十二歳で、最近子供ができて幸せだということだった。男女の仲は何でもありなので、いかにそこ

いう定点(坂口安吾、金子光晴そして観阿弥)という評論に、拠って立つ基盤がよく示されている。敗戦直後の変貌の下で、「清廉潔白で愛国の至情に殉じていた青年たちが、今や違法な物資横流しで財を貪る闇屋となり、鬼畜米英嫌滅せんと散った軍神の亡夫に誓い貞節を固く守った銃後の妻が、今やガード下で妖しく米兵を誘っている信じがたい変容に対して、安吾は言う。「人間が変わったのではない。人間は元来そういうものであり、変わったのは世相の上皮だけのことだ」と、墮落論を引用して現実の底を見る文学の根への肉薄は鋭く、氏の基盤の深さを窺わせる。墮落が自然であることを示した上で、論はさらに金子光晴に及んで「すべて腐らないものはない」といつそう深い位置へ引きずり込んでいく。筆はとどまらず、観阿弥の「卒塔婆小町」に及び、卒塔婆に腰掛ける老婆とそれを非難する僧との間の深淵な問答「卒塔婆問答」を引用して「極楽の内ならばこそ悪しからぬ。外は何かは苦しむべき」と、現実の側にごそ重点を置いて、実相の奥深さを顕わにする。この評論は文学の基盤をよく摘出して、評論としての優秀作になる。ただ、まほろば賞には評論のジャンルはこれまで加わっていないので、推薦作としてたくさんの人に読んでもらうことにしたい。

「生々流転/生きるということ」(伊東久仁雄)も若い頃の二つの死をリアルに回顧していて、胸に残る強い文章に

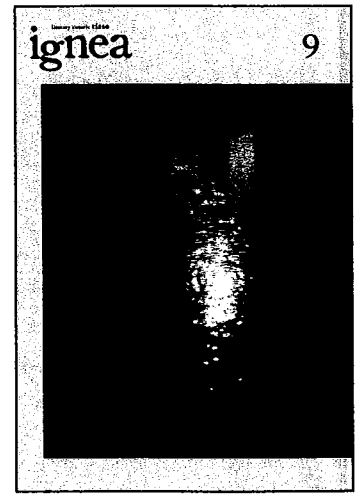
なっている。

巻末の長篇評論「カミュ『誤解』、サルトル『出口なし』、その源と将来」(林媚霊)は七〇ページに及び、壮大なカミュ論を展開している。カミュを戯曲から説く論評は珍しく、力作で、あらためてその領域を繕きたい気持ちにさせられる。その知識量と詳しさに圧倒される。ただ、全体は難渋で、わかりにくく、もう一つ伝わりにくい壁を感じる。現代に求められている重大な問題を孕んでいるので、濾過によって届くものにしてもらえればありがたい。準備秀作。

● 『igneal』 (大阪府) 9号

これも新しい同人誌で、若い力を感じる。英字の誌名も珍しいし、発行所も「文芸同人 igneo」となっている上に合評会もオンラインで開いている。表紙の写真も斬新で、判も一回り小さい。こぎれいな作りである。作品もそれに沿って潇洒な風がある。「花が」(齋藤葉子)は、毎朝ドアの外に置かれている花に訝しさと恐れを抱きつつ、少しずつ花が生活に入り込んできて花の幻想に包まれていく。そこから話が展開するかと思いきや、心配した恋人が来て、結局同棲していく。花は淋しさの象徴だったのかと誤解したくなるシンプルさで、「かわいい」「きれいな」領域から出していない。花の怖さをもっと書いてほしかった。

この破調パターンは誌の特徴なのか、「長谷川書店で会



いましよう」(岩代明子)にも見られる。タイトルも洒落ていて、まずそれに引き込まれる。最初の章前はおもしろく、読書好きと書店通いがいい雰囲気描かれ、書の世界の魅力が浮かび上がる。しかし途中から、生活が流れ込んで、本の世界から遊離し、どっちつかずの彷徨い流浪感に浸される。章立てが「一冊目」「二冊目」となっているで、本を中心に動いていくのかと思っていると、たんに数字と順序を表すに留まっている。単純に読書履歴をしっかりと書くほうが魅力を出せたかもしれない。

このセンスのよさと若さをどのように生かして、力のある創作に結びつけていくか、期待している。

● 『人間像』 (北海道) 190号

いつも気骨を見せるこの誌は、今号も迫力ある評論とエッセイを載せている。

一つは妹尾雄太郎氏の「軍刀による殺傷事件の真偽をめ

ぐつて——大誠丸遭難——」である。

これは兵員を乗せて沖繩への加勢に向かっていた大誠丸が米潜水艦の攻撃を受けて沈没し、海へ投げ出された兵員が、救命ボートに群がり、沈みかけたのを見て、乗っている将校が軍刀を抜いて手や腕を斬りつけたという事件を追って、それが事実だったかどうか、あらためて検証している内容である。もともとこの事件を元に吉村昭が「海の樞」として作品化しているのだが、その取材にも論及しながら、多角的に筆を進めている。その筆は、戦時下の人間の倫理に迫りながら、丹念に資料や人語りを押さえていて、誠実な結論に達している。救命ボートから降りた人たちを浜の漁村民が奮って助けたことを、当時の軍が隠蔽して、闇に葬ろうとした事実も明らかにする。吉村昭がどのように事実を拾い繋ぎ合わせたか、その経緯までもが検証される。堅い手際には感心させられるが、何か納得しきれないものが残るのは、掬い

作家集団「塊」プロ作家による
作品 添削講評

文芸誌新人賞作家があなたの作品を添削・講評の通信指導をします
懇切丁寧・的確な指導であなたの作品をレベルアップ!
八景正大(新潮新人賞)・大高雅博(群像新人長編小説賞)・都築隆広(文学界新人賞)・小浜清志(文学界新人賞)・五十嵐勉(群像新人長編小説賞)
「文芸思潮」の読者にはメンバーが特別料金で指導いたします。

あなたの作品を作家集団「塊」宛にお送り下さい!!

詩		小説	
1篇 A4用紙2枚以内	3000円	1篇 20枚まで	7000円
エッセイ		50枚まで	10000円
1篇 5枚以内	4000円	100枚まで	15000円
10枚以内	5000円	200枚まで	20000円

- ご希望の作家と面談指導も可能です。
- ご希望の方には案内所を送付します。お電話・ファックス・葉書などでお問い合わせ下さい。

作家集団「塊」事務局
〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13
TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848
asiawave@qk9.so-net.ne.jp

全国同人雑誌振興会

切れていない何かがあるのではないか、という疑惑も頭をもたげるからである。これは二つの点からさらに追及されるべきものを内蔵しているように思える。

一つには、救いを求めて救命ボートの縁につかまってくるその手を切り落とす残忍な行為についてである。この衝動行為の心理には、沈むかもしれない危機状況の中で自分たちが助かりたい気持ちと、他人の手を払い除ける行為で実現させるエゴイズムがある。これは自然であって、誰もがその危機状況にあつて、助かる方法を探し、それを実践することは当然である。ただ、それを実現する過程と手段に差異が生ずる。指や手を、生身の手で引き剥がすこともその手段であろうし、近くの板切れを引き寄せてそれを差し出すことも方法であろう。そこに残忍性が露出するのは、すがる手を軍刀で切り落とすからである。つまり、他に方法がなかったか、それを行う前に、ある発見力や視点や能力が存在しなかったかということが問題になるように思える。短絡的に邪魔な手を切り離すと発言の貧困さが、当時の人間力の低い軍将校の一面を表してはいなかったかという推論である。一瞬を争う危機に、他の手段を探すようなゆとりを持つことは無理であり、切羽詰まれば誰でもそのような軍刀を用いる行為に走ることは容易に想像できる。しかしすべての将校がそうした行為を取るとは限らないようにも思える。中には、転覆したら仕方がない、

船に乗せられて出ていくとき、敵潜水艦の攻撃を少しでも避けるためにジグザグに運航するのだが、それでも魚雷攻撃を受けて沈む船が出る。冷酷なのは、その沈む船に対して何ら救助の手は差し伸べられないことである。見殺しにするしかない。停まって救助したりしたら、自分が魚雷を受けて撃沈されるからである。

また以前「まほろば賞」特別賞を受賞した梶川洋一郎氏の「雲の向こうのメモントモリ」という小説の中には、原爆の落ちた日、憲兵が川に発動艇を繰り出す話が描かれている。川には死体が無数に浮き、さらに水を求めてたくさんの被爆者が入っている。「水を」「水を」の群れである。憲兵が発動艇を出そうとするが、無数の手が伸びて、すがってくる。動き出せない。捜索が任務のため、邪魔になる手を靴で蹴るが、後を絶たない。いくらやってもキリがない。ついに軍刀で斬りつけた……そんな気もする……という小説である。原爆の残忍さの分、こちらはさらに悲惨であり、手段を選ぶ余地も乏しい。

「見殺し」と、味方を救わずに逆に殺す「加害」は、こうした状況での行為を考える大きな文学テーマとして、もっと本格的に向かい合うべきものを蔵している。もう一つ読み応えがあるのは、長岡由秀氏の「生麦の滴」と言うエッセイである。これはエッセイの域を超えている。生麦事件で犯人に仕立てられた侍とその家族を追っ

みんなていつしよに死ぬのいいだろうと観念する将校もいないとは限らない。他に手段を求める視点を持つか持たないかは、重要で、戦場での指揮の成否はその柔軟な視点によって大きく変わるのが普通だからである。米軍なら軍法会議にかけられ、処罰されそうではある。結局は日本軍の思想と教育の貧困に辿り着くとも言える。

また、軍刀で切り落とすのが残酷なら、手で引き剥がすのは残酷ではないのか、靴で踏みつけ、蹴り落とすのとどう違うのかという差異も当然問題にならないければならない。要は、吉村昭の小説も、その残忍性だけを前面に出して、そこに第一の感興を持つてくることに違和があると思う。

もう一つ欲しい点は、戦争全体からその状況を比べ見る視点である。戦争では、それに近い状況、それ以上の状況は頻繁に起きる。私が聞いた話では、南方の最前線に輸送の記述には、執念の軌跡を感じるし、それと並んで取材を進めた「袴田冤罪事件」の衝撃性にも、因縁のような関わりを覚える。事件や疑惑を追っての衝動は、書くことへの何か宿命的な因果を感じさせるまでに強く響く。これを駆り立てるものは何か——死や空間を超えて漂うものの存在を想像せずにはいられない。それを想わせるだけの強い筆致がここにはあり、文章の存在根拠の一つを窺わせる。

今回は一つに集中し脱線したきらいがあつて、称揚作品は少なくなつたが、まとめたい。

優秀作

「しずり雪」 小網春美 「飢餓祭」 46号

推薦作 評論・エッセイ

「覚悟という定点」坂口安吾、金子光晴そして観阿弥

「軍刀による殺傷事件の真偽をめぐって」大誠丸遺難

妹尾雄太郎 「人間像」 190号

「生麦の滴」 長岡由秀 「人間像」 190号

準優秀作

「カミュ」誤解、サルトル「出口なし」、その源と将来

林娟靈 「文芸エム」創刊号

（全国同人雑誌振興会／五十嵐勉）

